



TITLE:

時計雑話：夏と冬とで時間が狂ふ

AUTHOR(S):

森, 拾三

---

CITATION:

森, 拾三. 時計雑話：夏と冬とで時間が狂ふ. 天界 1940, 20(230): 240-256

ISSUE DATE:

1940-05-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168011>

RIGHT:

春と秋との、神代に於ける記事はこれ丈けなのである。

春の女神として佐保姫の傳説があるが、佐保姫は、奈良時代に春を掌ると信ぜられた女神であるけれど、實在の神ではなく、秋の立田姫に對する詩的想像の神である。佐保の名は、もと大和の地名であつて、恰も奈良の東に當るので、方位の上で春を東に配當する處から出て居る様である(矢部善三氏説)。新勅撰集、好忠の歌に

『佐保姫の おもかげさらず おる機<sup>はた</sup>の  
霞たちたる 春の野邊かな』

とある。

又、開化天皇(皇紀504—563)は、春日之伊邪河<sup>いさがは</sup>の宮にましまして、天下を御治めになられた。要するに、春は一年の初めであり、春の初めを知ること、遠い神代の昔より、農耕を営み、又、日常の生活を営む上にも、最も必要なことであつて、野山に霞が立つのを觀て、人々は“春が來た”ことを知り、年の改まるのを知つたのであつた。天平の昔以來、今に残る春日祭は、上代に於て、春日の御祝をした遺習であるとも考へられるのである。(皇紀2600年5月1日)

## 時 計 雜 話

夏と冬とて時間が狂ふ

森 拾 三

時の記念日に因んで、私共の日常生活から一時も離すことの出来ない「時計」について、専門的立場から思ひつくまをとお話ませう。

この腕時計や、懐中時計は、何石入りだといふことはよく口にするとおろです。機械に寶石を使用することは、機械の運轉率を高め、磨滅を防止するためであることは今更申すまでもないことですが、優良時計には尠くとも7個の石を用ひ、10石、11石、15石、16石、17石、19石、21石、23石等と入れてあるものもあります。しかし逆に石が多いから必ず優良時計とは申されないことは、石の性質、機構によつて違ふからです。腕時計や、懐中時計の大きさを表すために「型」と「サイズ」の二語を用ひます。「型」は歐洲系の時計を呼ぶ場合、「サイズ」は米國製の時計に對して用ひる場合、「型」や「サイズ」を計る基準は、ともに、下の地板、即ち文字板の着く面の直徑で、一型は2.256 耗に當ります。「サイズ」の始まりは零番で1吋の30分ノ5を基本とし、その後のサイズは30分ノ1吋を1番とします。(第256頁へ)

何だか、號數から見ると、二ヶ月もごまかしたやうに見えますが、よく見て頂けば、決して其んなものではありません。第234號が倍大號となつてゐるのと“一月號”や“二月號”が今までより1ヶ月早く發行されてゐるのが、改められる點です。會員たちに何の御迷惑をかけてゐないトリックを御覽下さい。發行日を4—5日變へたのは、名目上、2ヶ月も以前に發行される形式を一寸改めただけです。

#### (第240頁より)

以前よく、この時計は何回修理してある等といふことを聞きましたが、それは胴と蓋との合符號として側に刻まれてある線の數を見て修理毎に刻まれたものだといふことなのですが、全く妙な宣傳をしたものです。最近かかる愚を耳にせぬことは科學日本人の一面目とも言ひ得ませう。一昨年元旦から滿洲も中央標準時に歩調を合すことになりましたが、これは明治9年秋頃から東經135度の子午線の「時」を標準時とし、日本全國一般に、この時制によることにされたもので、これと今一つ東經120度の子午線上の「時」を西部標準時とし、明治29年1月1日から臺灣地方一帯において使用することになったのです。又、緯度の高くなるに従つて時計の振子の振り方が速くなり、時間が進むものだといふことを知つておいて戴きたい。赤道附近では緯度1度變つたために、振子の受ける影響は24時間に付1秒弱から4秒強迄ですが、我國の主要區間の例を挙げますと、東京長崎間(差2度56分)=24時間に付10秒、東京函館間(差6度7分)=24時間に付24秒。

その他、夏と冬とで時間が狂ふといふことを聞きますが、これは天府輪を單一の金屬で作りますと、溫度が昇れば膨脹して直徑が大になり、従つて週期が大きくなり、時計が遅れ、溫度が降つた時には、その反對に進みます。例へば夏と冬とで溫度の差攝氏25度とすれば、夏において正しく合つてゐた時計は、冬になると1日に6分以上も進むことになります。かやうな溫度による變化を消却するために、所謂切り天府なるものが工夫されたのであります。最後に時報について一言、郵便局と鐵道は從來毎日(日曜、祭日を除く)正午3分前に電鈴がなり始め、正午に東京天文臺で自働報時機へ通ずる電線を斷つと全國一齊に電鈴が止む。この時が正午ですから、正確に時計を合はせようとするには、その電信係に行つてこの電鈴を聞くことでしたが、ラヂオの出現以來これを家庭に送つてくれて、ゐながらにして聞き得るやうになりました。随つて現在ではラヂオの正午の時報を最も正確なものとして承知することです。電話での時報で何秒といふ正確さをテストしようとする人が往々ありますが、概略の時報以外には役立たぬものであります。